

先日、私はある会議に出席するために、西乙訓高校へ出向く機会がありました。その会議の席上で、思いがけず西乙訓高校の校長先生が、あるエピソードを紹介してくださったのです。そのエピソードの主人公が四中の生徒であることを確信したとき、四中の一員であることをとてもうれしく感じ、心が温かくなりました。そして、自分が、四中につながっていること、所属していることを強く意識した瞬間でした。それは、オリンピックで、日本が勝利したときにわき起こる誇らしい感情とよく似ているなと感じました。そこで、私と同じように四中につながっている人とぜひとも共有したくなり、ホームページで紹介することにしました。

それは、晩秋のとある午後のエピソードでした。はるばる東京方面から、西乙訓高校を訪ねて来られた方があったそうです。その遠方からの来訪者は、金ヶ原のバス停で下車し、高校に向かおうとしていたようですが、全く逆の方角に坂道を下って行ってしまいました。どんどん西乙訓高校から離れて行ってしまったのです。約束の時間も迫るなか、道に迷ってしまって途方に暮れていたところ、たまたまそこを帰宅途中の女子中学生が通りかかり、すぐる思いで彼女に西乙訓高校の場所を尋ねたそうです。見ず知らずの困り果てた来訪者に、彼女は、目的地までの道のりを教えるどころか、わざわざ西乙訓高校の校門まで道案内をしたというのです。



校長室前のバラ

東京からの来訪者は、そのことを大いに喜んで、西乙訓高校の校長先生に、「いまどき、あんなところやさしい中学生がいるんですね。」と語ったそうです。校長先生は「きっと、四中の生徒さんのことでしょう。」とおっしゃられていましたが、その席に居合わせ、そのエピソードを耳にした私は、とても誇らしく感じました。高台での出来事ですから、私も、疑いもなく四中生だと思っています。

会議が終わり、学校に帰ってから早速その話を職員室でしたところ、2年生のある先生が、「職場体験の成果が出ているな。きっと2年生でしょう。」と自慢げに話すのです。すると、そばで聞いていた3年生のある先生が、「部活動の時間帯だから、3年生ですよ。」と応じるのです。その職員室でのほほえましい会話にも、私と同じように、身近な生徒への愛着と誇りにつながるものを感じずにはおれませんでした。

その話を聞いた余韻でしょうか、その日一日、とてもうれしく過ごすことができました。私は、四中で生活している一人として、四中のことがほめられることがこんなにうれしく感じるのかと、改めて実感したエピソードです。